

はじめに

私は職業生活のほぼ大部分を、クローデルの存在抜きに語ることはできない国、日本で過ごした。実際、日仏両国の関係において、クローデルが手を染めなかったものは何ひとつないように思われる。私はクローデルがフランス外務省の加護のもとに東京に創設した日仏会館の研究員だった。私はまた、クローデルが、新しい施設の経費を負担しようとしなかった本省の意向に逆らって、京都に開設した関西日仏学館の館長だった。私は同館館長時代の六年間をヴィラ九条山の設立準備にあて、設立後の二年間その成長を見守った。ヴィラ九条山とは、クローデルが最初に京都の日仏学館を設立した場所の跡に新設されたフランス人芸術家のためのアーティスト・イン・レジデンスである。したがって私は、クローデルが創始したこれらの素晴らしい文化施設の維持に携わる特権をしばし享受したという思いから、必然的に、二〇〇五年のクローデル没後五〇年記念行事の際にクロ

ーデルの日本時代を詳しく調べてみようと思いつたのである。クローデルの日本時代は、奇妙なことに彼の中国時代に比べフランスでは研究対象になっていない。私より前にこのテーマについて書くことができた、いや書くべきだった人々は、日本語の表現を使えば「灯台下暗し」で、身近にあることが見えていなかったかのようなのである。

かくて次のような問いが立てられる。なぜクローデルは、日本より長く滞在し、より重要な政治的任務を帯びていた任地を含め、他のいかなる国よりも日本において、あれほどまでに二国間関係を体現する存在になったのか。なぜクローデル研究は日本におけるフランス研究の特別な分野を形成しているのか。いったい何ゆえに、日本の同僚たちはクローデルの生誕一〇〇年、一五〇年、没後五〇年を記念するために、何年もかけて大作家を称えるシンポジウム、展覧会、コンサート、戯曲上演などの学際的プログラムを準備するのか。一言にして、日本をクローデルの土地たらしめているのは何なのか。

同世代の中では長寿だったクローデル¹は、引退後の余生を半世紀前に舞台用に書いたのではない古い劇の上演用台本を書いて過ごす「ブラングの長老」²、聖書の注釈を書く「教会博士」のイメージが支配的で、そのため敏腕な外交官、しかも文化からはほど遠い職務の公務員として、たえずエキゾチックとは言わないうまでも遠隔の地に任命された外交官としての経歴は、一般公衆には隠されてしまった。遠隔地のなかでも、中国の一五年と日本の五年を合わせて二〇年滞在した極東は最も長い。駐日フランス大使時代の一九二六年末にクローデルはワシントン勤務を命じられる（第一次

大戦後の独仏関係はデリケートだっただけに、他のトップ外交官同様クローデルもベルリンを希望していたが、東京の後のワシントンには間違いなく昇進である。そのときクローデルは外務大臣宛に懇懇丁寧な言葉で「自分の能力と才能では及ばない」職責を受諾する旨返信するが、この偽りの謙虚さは、微笑まじりのペンで欄外に「中国―日本の慣用語法」と注記(註)されている。《break up of China》(中国分割)の時期に若手外交官として軍事および鉄道敷設の案件を担当し、第一次大戦中にはイタリアに経済特使、商務担当官アタッシェとして派遣されたあと、駐ブラジル全権公使としてフランス軍のためにコーヒーと食糧を調達し、駐米大使時代には一九二九年の株価大暴落を他に先駆けて予測し分析しえただけに、経済金融のエキスパートを自認し、同僚同輩からもそう見られていた。

残る駐日大使時代は、クローデルの四二年の長い経歴のうちで、芸術家としての要請と外交官の活動の間の見かけ上の対立(彼自身はそこに何らの矛盾も認めなかった)が、突然、魔法のように解消された唯一の時期だった。クローデルが幼年期から夢見、姉カミーユの日本への情熱の影響で外交官を志望したと思われる国日本の美学と道徳を親しいものと感じたのであろう。また恐らくは、自分の国で理解されないことを嘆いていたこの前衛作家は、詩人のプリンスとして迎えてくれた国で、日本の一流の画家や演劇人と芸術的協同作業を行うことで、その外交活動の豊かさを目に見える形にする機会を見出したと思われる。日本の経験は後にフランスに帰ってからのダリウス・ミヨールやオネゲル、イダ・ルビンシュタインあるいはジャン・ルイ・バローとの芸術的協同作業の先駆けになった。しかし、そうするうちにも「詩人大使」(地元新聞が敬愛を込めてつけた渾名)は、

「国事に関わる義務」に腐心する国家公務員として、職責を忠実に果たした。クローデルは、外務省が彼に託した任務のなかでも中心的な位置を占め、「特に適任」とされる言語と文化方面での行動アクションに関する指令を受けて着任した。

クローデルが初の大使ポストとして一九二一年末に日本に派遣されたのは、極東問題の経験豊かな専門家としてだけではない。永遠の外務省事務総長でありクローデルの揺るぎない庇護者だったフィリップ・ベルトロ(8)が評価し保護する作家としてもあった。クローデルには、第一次大戦での敗北後も（しかも中国山東省と南洋諸島での権益を日本に奪われたにもかかわらず）日本で影響力を保っていたドイツの文化的影響力を抑え込む仕事(9)が期待されたのである。大戦中は「敵国」だったドイツは単なる「ライバル国」になっているが、日本の近代化の時期に教育や文化の領域、特に医学、法律、哲学、音楽の分野で獲得した支配的地位に今も留まりつづけている。外務省の訓令は新大使にドイツの「影響力」に「全力で対抗し」、可能なあらゆる手段を用いて「我が国の言語と文学と学術に関する知識」を普及すべく努め、同時に日本での「ドイツ機関の発展を食い止める」ことを求めている。(10)

訓令はしかし、六、七年前から準備が進められていた東京にフランスの文化施設を開設する計画については一言も述べていない。おそらく、新大使に期待して当然の、既に長大な行動リストアクションに追加するには十分機が熟していないと判断したのであろう。それだけに、一九二一年末の着任から三年で、東洋学研究と知的協力のプレステイージュの高い永続的センターである日仏会館の「公式の

設立⁽¹⁾にこぎつけたのは、クロードルの功績と言える。日仏会館はクロードルに託されたミッシヨンの象徴的実現であるだけに、しばしばクロードルが計画の元締めだと思われる。彼が駐日大使に任命されたとき、彼も彼の任命者も一九二三年九月一日の黙示録の大地震は想像もできなかったが、この大惨事が逆説的にも、大使の驚くほど巧みな戦術によって、それまで少なからず難航していたプロセスを加速させることになった。

一年間の休暇で一時帰国したあと一九二六年初めに帰任したクロードルは、京都に新しいフランス語教育とフランス文化普及の施設の開設に携わることになる。地方にフランスの文化機関がないことに苦慮していたクロードルは、関西の親仏家たちのイニシアティブによる計画を支援するが、今度はパリの本省のきわめて消極的な態度に直面する。外務省は新しい施設の運営費用を負担することに消極的で、京都に新しい施設をつくると東京にできたばかりの日仏会館と競合することを憂慮した。フランスの国益に沿った行動であると確信したクロードルは、政治的勇氣と強い意志をもって計画を実行に移し、本省は不本意ながら既成事実の前に屈服せざるを得なかった。関西日仏学館が一九二七年秋に京都を見下ろす九条山の高台にオープンしたとき、クロードルは既に離日シワシントンのポストに就いていた。

それから時はめぐり、日仏会館は幾度かの移転と再建を経て、一九九五年から都心に近い恵比寿のガラスとコンクリートの建物に落ち着いている。他方、京都に開設された日仏学館の、バルコニーから古都が一望できる立地は街の中心から遠く、大学の学生を引きつけるには地の利が悪かった。

そこで、学館は開設から一〇年後に市内の大学街の只中に、オーギュスト・ペレの弟子の設計による建物を新築し移転した。九条山の美しい敷地はその後半世紀も放置され、学館の親元としてクロードル大使によって設立された日仏文化協会は、一九八六年にアーティスト・イン・レジデンスをその跡地に建設することを決定した。断崖のような斜面に張出す大胆な建物が建てられた。建設計画には地面の圧密工事が必要で、作業員が登山用のザイルを装着して作業するような急斜面である。日本に講演旅行に来ていた哲学者のミッシェル・セールは、工事の光景を見て、彼自身が若いとき参加したガロンヌ河の浚渫工事で両手でロープを引っ張った経験を思い出し、翌年の落成式に来て開館記念講演をしてけると約束した。ミッシェル・セールは、かつてクロードルが行った記憶に残る日仏会館の開館式スピーチに木霊を返すように、「及ばずながらクロードルに代って」、一九九二年一月五日にヴィラ九条山の開館講演を、フランス南西部アジャンなまりの見事な雄弁で行ったのである。⁽¹²⁾